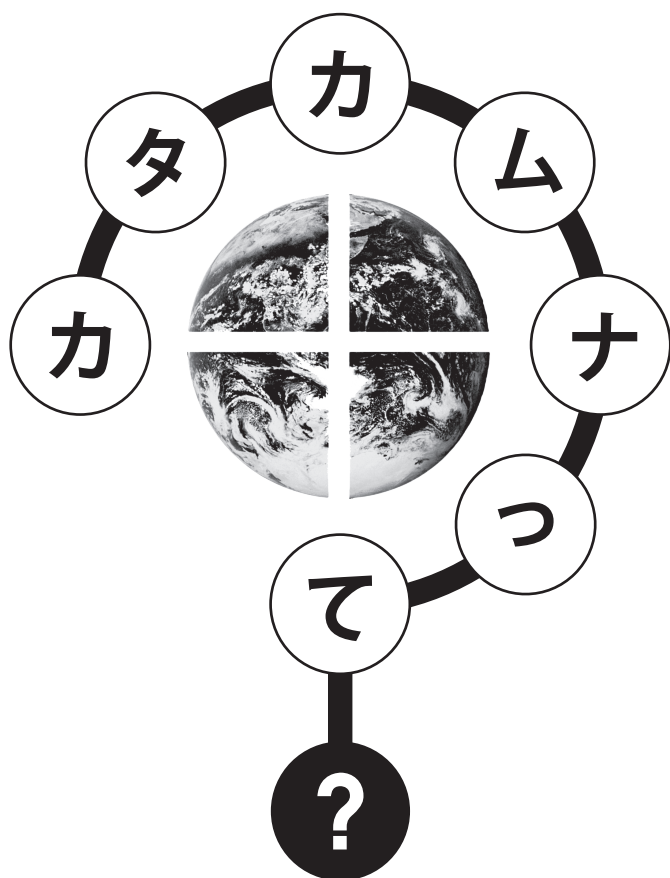


『カタカムナって、何?』

カタカムナで「幸せ」になれるか?

《前編》



潜在意識の心理カウンセラー・姓名解読リーダー

三宅麗子 編・著

装幀・デザイン・イラスト

浜田有弘（株式会社ジツクラド）

【はじめに】

このたびは、数ある書物の中からこの本に興味をお持ちいただき、誠に有り難うございます。

まず始めにお断りさせていただきますが、この本は「カタカムナのウタヒ」の解読本ではございません。著者の体験と直感から生まれた「カタカムナ」への疑問の数々を本音で書かせていただきました。それらを真摯に認識するコトによって、著者自身の人間としての悩みもある程度軽減できたと感じております。ゆえに私のように「カタカムナ」を知っても未だに真理を掴みきれないと感じておられる方々や、「カタカムナ」を人生の指針とされたい方々や、「カタカムナ」の初心者の方々にぜひお読みいただきたいと、渾身の思いを込めて書かせていただきました。前著『あなたは誰？ 名前は運命を左右する？！』（2015年7月28日発売）から今年7月で早や2年が経とうとしています。その間、読者様から有り難いご感想やご意見をいただき、この紙面をお借りして篤く御礼申し上げます。

ただ「カタカムナ」の発見者、**檜崎皐月氏**や唯一の後継者、**宇野多美恵氏**の編著『相似象字会誌相似象』の読者様には宇野氏の解説に添った「カタカムナのウタヒ」をもっと知りたい、ぜひ二冊目を、との熱いご要望などにもお応えできず、本当に申し訳なく思っておりますが、宇野氏との面識など一度もなく、また物理にも疎く、さらに解読者でもない私が書ける「カタカムナ」とは？ いえ、自分にしか書けない「カタカムナ」とは？ と今までモンモンとトキを過ごしてまいりました。

世間ではさまざまな「カタカムナ」の関連本が出版されているにも関わらず、さらに新たな本が出れば出るほど疑問はつのり、それとは反比例してますます自分自身の真理から遠のくようで、この思いは一体、何？ 自分だけが持つ疑問なのか？ 自分の頭がおかしいのか？ 性格が悪いのか？ と…。

結局、出た答えは自分が感じる疑問の数々を**カウンセラー目線**（心理分析的に）で正直に書けばいいのでは？ その疑問をシッカリと認識すれば答えは見えてくるのでは？ という結論に至りました。

なぜ、自分は「カタカムナ」の真理を追い求めるのか？ いえ、一体、自分は「何」を追い求めているのか？ 一体、

「何」が知りたいのか？ 一体、「何」にさ迷っているのか？ 一体、「何」が不満なのか？ などを突き詰めていくと、結局、私の知りたかったコトは宇宙の真理や地球の法則などというそんな大それたモノ・コトではなかったのです。

しかし30年以上も「カタカムナ」に接していると、「カタカムナ」を学ぶ本当の目的すら見失ってしまい、挙げ句の果てに違う目的のために悪戦苦闘してしまい、その結果、長い迷路から抜け出せずにおりました。いえ、迷路でさ迷っていることすら自覚できてはいませんでした。

そして「カタカムナ」関連の本を出してから2年間、私が自問自答している意識や心や感情や、あるいは命や霊魂や霊や魂とは何ぞや？ という切実なその疑問の奥には、結局、自分とは何ぞや？ 人間とは何ぞや？ 日本人とは何ぞや？ さらにその奥の奥にこびりついていたモノに気づくと、ただただ心の不安をなくしたい！ というとてもシンブルな思い（意識）だけだったのです…。

要するに自分が今生きている中で、全く不安なく心平安に過ごしたい！ たとえどんな大きな災害が起きてもドッシリとして心安らかにその日を迎えたい！ たとえ病気になるっても、お金が無くつても、全く動じず心健やかに生きていたい！ 一言でいうと「心の平安」、ただそれだけだったのです。それなのに本来の自分の心の不安から目を背けてしまい、その答えを最後の藁にも縋りたい気持ちで「カタカムナ」に求めていたのが間違だったのです…。

そして「カタカムナ」にハマればハマるほど自分の理解力の無さゆえの焦燥感と劣等感のために、さらに「カタカムナ」に溺れてアップアップしてしまっただけでした…。その間にはありとあらゆる「カタカムナ」関連の本を買ひ漁り、いろんな講座にも参加して、ついには自分で「カタカムナ」関連の本まで出版しながら、その結果、さらに「カタカムナ」で心の安らぎが失われていく、というこの不可解なパラドックスとは…。

しかし少しずつ冷静になって「カタカムナ」から距離を置き始めると、ナント、不思議なコトにそれに反比例して昔のようにひらめきやアイデアがドンドン湧き出してきた、独自にカウンセリングのイメージ療法などに応用していった結果、自分自身の根の深かった心の不安もいつしか消えていき、それにつれて相談者様の回復力も劇的にアップしていったのでした…。いやはやなんとも皮肉なコトですが、でもこれはすべて事実です。

直観を鍛えるはずの「カタカムナ」から遠ざかると直感が面白いほど溢れ出し、すると自分自身の本質や使命までが見え出した…。とはいえ「カタカムナ」からの満足感を得られず、その挫折感は測り知れず、それが心の澱となりながらも、そのまわりつく澱の中から一步も逃げずにどつぷりと向き合おうと覚悟を決めて開き直ったら、違う視点から「カタカムナ」の持つ**本質や使命**が見えてくるようになりました…。

長年「カタカムナ」に対して惨憺たる気持ちを引きずっていたのは、一体、何だったのか？ と冷静に自分自身に「カタカムナ」についてみると、**榎嶋卓月氏**と**宇野多美恵氏**の存在が大きくクロースアックしでしたのです。いえ、「カタカムナ」をシッカリと理解するにはこのお二人と向き合わないとダメなのだと切実に感じたのです。偉大過ぎるお二人を無視すればするほど、魑魅魍魎とした迷路に入り込んでしまうのです。その迷路から抜け出すには、意を決してお二人を知る以外に方法はないと覚悟を決めたら、一筋の小さな光が目の前に現れたようでした…。人生なにごとも「覚悟」だったのか？ と…。自分には太刀打ちできないとお二人から目を逸らして諦めてしまつては、「カタカムナ」を見失つてしまうのです。お二人からの逃避は、本当は自分自身からの逃避でもあったのでした…。

「カタカムナ」を通して榎嶋氏が唱える潜在の存在をしっかりと見極める役目（使命）が「カタカムナ」を学ぶ者には課せられるのです。またそれを果たさないと「カタカムナ」を学ぶ資格がないともいえるのでしよう。

それはまた私にとりましても、お二人の唱えられた難解極まりない**潜在物理の「相似象学」**にもう一度目を向けるという覚悟の再出発でもありました…。

要するにイロメガネや先入観抜きでお二人に「焦点」を当てるべきだったのです…。すると今まで意識しなかったお二人の「**目的**」の違いに突き当たったのです…。そしてそれが大きな意味を持ち、それぞれお二人の思念もあぶり出され、さらに「カタカムナ」の謎や矛盾も見えてくるようでした…。

私は「カタカムナ」に巡り合っても、その内容や解説よりも無意識について、カウンセラー目線を優先させてしまい、榎嶋氏と宇野氏の経てられた波乱万丈の人生（生きざま）に興味を持ち続け、そこからさまざまな疑問が湧いてきてモンモンと無駄な日々を過ごしてしまつた…。とずっとマイナス意識で後悔していたのですが、しかし自分の本を出し

てから、もう一度冷静に「カタカムナ」についてじっくり内観（カムカヘル）したら、数々の疑問は良くも悪くも私自身がカウンセラーという職業柄、またそこから一步も逃げ出さなかった、いえ、逃げ出せなかったために、それが反って「プラス」となり、今回もこの本を書き上げる結果となり、これもまたそのパラドックスの不思議さに感謝せざるを得ませんでした…。

しかし「カタカムナ」に心血を注がれたお二人をカウンセラー目線で見ると、私はなぜか、不思議でなりません。あれだけの情熱と覚悟の有られた偉大過ぎるお二人がなぜ、最後の最後で目的（志）を全うできなかったのか？ なぜ、満足のいく人生を歩まなかったのか？ いえいえ、ご本人たちには達成感がありだったのか？ 死ぬ間際は、一体、どういう思いだったのか？ 実際のところ、「カタカムナ」を極めたお二人が真理を分かっただけで自分の人生を変えられたのか？ 私には到底、「カタカムナ」で人生を変えられたとは思えない！

それらの答えを知りたいためにこれを書いている、いえ、書かせていただいているといっても過言ではありません。お二人の真の心のお聞きしたい！ 魂の声を感ぜたい！ それが叶えられなければ、「潜象」や「カム」や「アマ始元量」なんて私がつべこべ言うのもおこがましく、「カタカムナ」も私にとつては無用の長物と化し、何の価値もないモノで、やっぱりこの世だけの現実世界にアクセク生きるしかないのか？ と諦めざるを得ないのです。いえいえ、しかし私には確実にあの世というか、この世以外の世界があると小さいときから実感もし、確信もあるというのに…。

だからそれらの疑問を解くヒント、いえ、知るヒントは、檜崎氏と宇野氏の編著『相似象学会誌 相似象』を紐解くしかないのです。そこには檜崎氏と宇野氏の生きざまというか人生の行動心理が一杯詰まっていますから…。それらの行間から滲み出るお二人にとつての本当の言葉（言葉）を認識できるのは、本来書き手ではなく読み手に委ねられるのでしょうか、良き読み手を引き寄せるのもやはり書き手の品格の賜物でしょうか…。なにはともあれ、自分自身の内観に伴い、奇しくも自分の意気地なさやズルサも垣間見え、やはりこの本を書くコトは、自分自身に対するカウンセリングだったのかと、つくづくサトラせていただきました。有り難うございます。

そして私が一番気になったコトは檜崎氏の「カタカムナ」を世に出す「目的」は何だったのか？ でした…。

檜崎皐月氏と宇野多美恵氏の編著※『相似象学会誌相似象第八号』には「檜崎皐月の関心は、もっぱら、日頃の彼のアマ始元量（潜在の存在）の仮説を、現代科学の将来に赴くべき方向を示唆するものとして、哲科学の体系にまとめることであった。（53頁）」

「カタカムナ」を学ぶ私たちはアマ始元量やカムなどを100%信じて、決して疑いませんが、しかしこの文章を読む限りでは、「カタカムナ」の潜在の存在などはあくまでも檜崎氏独自の「仮説」以外の何ものでもなく檜崎皐月氏の理論に過ぎなく、それはまさに檜崎氏の「理論物理学」なのです。世間で知られるガリレオやコペルニクスの地動説やピタゴラスの定理などでもなく、あくまでも「カタカムナ」は檜崎皐月氏の「アマ始元量理論」なのです。その「証明」が100%完全に成し得ないままに死の床に臥されたのはやはり、断腸の思いだったでしょうし、さらに宇野氏もまた、「カタカムナのウタヒ」の八十首の解説は第七五首までしか出版（最後の本は江川和子氏が出版）されておらず、同じようにさぞや、無念の思いがあつたコトでしょう。察するにあまりあります…。

ではなぜ、お二人とも強く望んだにも関わらず最後の最後でその目的を果たせ得なかったのか？ 私にはそれが決して偶然とは思えないのですが…。神は最後の最後で、なぜストップをかけられたのか？

さらなる疑問はなぜ、お二人とも人間的な（世間的な、家庭的な）「幸せ」からは程遠い生き方を強いられたのか？人間として男として父として、あるいは女として母として、悔いのない人生だったのか？ 宇宙の真理といわれる「カタカムナ」を究めれば究められるほどに個人的な「幸せ」からは遠のいていかれたようで、それが私には全く腑に落ちなかったのです。反対に「カタカムナ」に関われば関わるほど、孤立無援ともいえるほどの苛酷な環境に陥っていかれたように感じるのは、私だけ？ 死に際も普通の人が普通に病院で安楽に亡くなるのではなく、やはり不本意とも見えるような死に方に思えるのは、一体、なぜ？ そんなコトをあこれ考えていくと、この先「カタカムナ」を勉強していても、凡人の私が望む心の平安などにはサラサラ到達できない気がしてなりません。いえ、「カタカムナ」で本当に心の平安が手に入るのか？ 人生が変えられるのか？ 師とも仰ぐお二人がそれを叶えられたとも思えないのに…。

要するに「カタカムナ」で普通の人間が望む人生や未来が本当に手に入るのか？ 発見者や後継者すら人生を全うで

きたとは思えないのに…。だげどこのまま「カタカムナ」を捨ててしまおうと深い挫折感が残ってしまいそうだし、またその思いもゴマカしてしまいそうだし、先へ進めないような気もするし、真理からも外れるような気もするし、やはり「カタカムナ」の関連本も出している手前、無責任なような気もするし…。しかしご期待に添える二冊目は100%私には無理だし、さらに私には疑問を無視してまでアヤフヤなコトは書けないし、などなど往生際悪くモンモンと…。

そして、やっと、気づかされたのです…。それは、私が「カタカムナのウタヒ」の解説で宇宙の真理などというそんな大それたコトではなく、また檜崎氏や宇野氏の真摯な「思念」を無視してまで、方向違いのコトを書いてはいけな。さらに自分の良心を歪めたり、魂に背くようなコトをしてはいけな…。もし、それをすれば檜崎氏や宇野氏の「魂」に申し訳が立たない…。しかし、正直に私が知りたいコトや、疑問に感じているコトを檜崎氏や宇野氏や他の研究者、さらに読者の皆様に問いかける気持ちで書き綴るならば、あるいは私でも何とか書けるのではないか？ という思いに繋がっていったのでした…。

そして、やっと重い腰をあげて書き始めてはみたものの、書き進むにつれてますます大きな疑問に突き当たり、何度もパソコンの前から逃げ出したくなる日々が続きました…。このザワザワする思いは一体、どこから来るのか？ とさらに冷静に真剣にカムカへってみますと、やはりあの前著を出そうと決めたトキの、もう一つの大きな出来事がネックとなって、なかなか思考が定まらないことに気づかされたのでした…。しかし前著ではそれを知ったショックがあまりにも大き過ぎたためにそれをストリートに書く勇氣もなく、その噂から逃げるような気持ちが湧き、しかし知った限りは、いえ、私に知らされたコトもカミの計らいいかとも感じ、結局、発見者と後継者のお二人の汚名を晴らそうと、「カタカムナ」を学ぶ者として自分のできるご恩返しは何かと考えた末の、お二人を讃えるしかスベのない姑息な前著となってしまうたのでした…。

今回はなぜ、お二人の理不尽な噂を自分は耳にしたのか？ なぜ、自分が知る必要があつたのか？ 知つたのは偶然なのか？ 必然的に知らされたのか？ そうであればそれはなぜか？ などの疑問に意識を向けたトキ、自分の貴重なこの体験も個人情報保護法も考慮に入れながら、事実としてキツチリと書かせていただくという強い覚悟をした途端

まるで霞が晴れたように文章がスムーズに流れ出しました。私は自分の経験や体験から極力事実を書くコトをモットーに、また私の人となりをご理解していただきたいがために自分のコトを書いております。それは読者様への私という肩書きも資格もない人間の「商品説明」でもあるとお考えいただければ、こんな幸甚なことはございません。

というようなさざまな思いを込めまして、この度二冊目の本を出版する運びとなりましたが、今回も「カタカムナのウタヒ」の解説書ではございませんし、私には解説などできる力など全くありません。私にとりまして「カタカムナのウタヒ」を解説するというコトは宇宙の真理を解明するに等しく、それは私自身が死ぬまで、学ぶ側に位置して追求すべきモノと心得ております。それゆえにこの本は「カタカムナ」に疑問を持たれる方々や、初心者の方々に向けての「疑問集」ですので、「解説書」をお求めの方々や、「カタカムナ」に何の疑問も感じておられない方々や、満足されておられる方々にとりましては、この本は全く必要のない無駄なモノであると、ここにお断りさせていただきます。

たった一冊の本で真理や人生や未来や人間が分かれば、それはもう神ワザというもので、まして次から次に二冊目、三冊目の本など出す必要もなく、何も、誰も苦勞することはないので。そんなことはあり得ない話ですので、どうか書物の持つ「たかが本、されど本」の意味を十分にご理解いただき、この本もくれぐれも期待せずに1%の共感を受け取っていただきたいと存じます。それゆえ私自身は人間として、日本人としての生きる指針として、「カタカムナ」とは今後も自分の直感のみを信じ切つて、悪戦苦闘して一生、寄り添って参りたいと存じますし、今後は人間や日本人をテーマとして、カウンセラー目線を忘れずに「カタカムナ」を参考にさせていただきたいと考えております。

宇野氏の※『相…⑧』では榑崎氏が『よく自分の写真を入れて著書を出す人があるが、僕から見れば、ああいうのはやはり、自己を顕示したい知性の低さがあると思う。』（24頁）

榑崎氏にお言葉を返すようですが、今の世は昔とは異なり、本名や写真を出してモノ申すほうが危険極まりない世の中となっており、榑崎氏が言われることも一概には断定できないと思います。ところが皮肉なコトに、自己顕示欲を嫌ったはずの榑崎氏の存在が、現在の「カタカムナ」を取り巻く環境では「榑崎皐月」のお名前だけがメジャーとなり、

語り継がれるでしょうが、哀しいかな「宇野多美恵」のお名前はまだご本人が亡くなられて10年ほどしか経っていないのにも関わらず、もはや風前の灯のように感じてなりません。それを考えますと、もしも『相似象学会誌』に宇野氏の名前や写真がキツチリ載っていたら、その存在は今とは違う扱いになっていたのかもしれない。しかしあの当時は、榊崎氏には世間から宇野氏を守る必要があったのでしょうか…。

宇野氏の存在がなければ私たち普通人には榊崎皐月氏のお名前も、さらに「カタカムナ」の存在も、また宇野氏が自費出版された数々の『相似象学会誌』も世には出なかったはずですので、今現在の「カタカムナ業界」(?)の宇野氏に対する扱いはいかなものか? と宇野氏をないがしろにする現状に心を痛める一人として、すこぶる「反カタカムナ的」で宇宙の真理、いえ、地球の真理から外れるのでは? と全く解せない気持ちでいっぱいです…。

私は自分のカウンセリングに「カタカムナ」の「図象符」を利用していただいている関係上、そのご恩をお返しすべく今回は宇野氏のお名前をもう一度「カタカムナ」を勉強・研究される方々に、シツカリと認識し、刻印していただきました、しつこいほど宇野氏のお名前と「相似象」という言葉を書かせていただきました。

「カタカムナ」に真摯に関われば関わるほど、疑問や謎が浮き彫りになってきて、そこからどう心の折り合いを付けていくのかも、今回私の大きな試練となりました。その結果、皮肉なことに乗り越えるべき相手は榊崎氏でも宇野氏でもなく自分自身の意識や感情でありました…。

もしも「カタカムナ」の触れてはいけないコトや、一般の事実とは違うコトが出てきましても、榊崎氏や宇野氏に対する尊敬の念やご恩や感謝の念は決して消えるものではないことをここに、重ねて書かせていただきます。

さらに、今回は余りに文章が多すぎたために不本意ながらこの本は文字も小さく、さらに「前編」と「後篇」に分けざるを得ませんでしたコトをここにお断りをさせていただきます。また「後篇」の詳細などは、「おわりに」にてお知らせいたしますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

(※注) 榊崎氏や宇野氏への尊敬とご恩と感謝の思いを持たせていただいているコトをお含みとりの上で、「カタカムナ」

への疑問や、檜崎氏や宇野氏の「解説」そのものの疑問も書かせていただきますが、これらは決して批判ではなく疑問としてお受け取りくださいますよう、心からお願い申し上げます。

平成二十九年 盛夏

潜在意識の心理カウンセラー・姓名解読リーダー

三宅麗子

